淨土

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和二十一年十月廿日印刷納本昭和二十一年十一月一日發行

第十二卷　第六號

十一月號

往生はよにやすけれと
みな人の
まことのこゝろ
なくてこそせね

（法然上人）

目次

國土を淨めん……（三）　佐藤賢順

隨筆　敗戰……（六）　和田正系

會員の頁
成道の日……（一三）　武田正信
現代川柳ばなし……（一三）　風來坊

童話　ひまわりの種子……（九）　合田徹雪

信仰相談
往生について……（一四）　中村辨康

編集後記……（一六）

國土を淨（きよ）めん

佐藤賢順

敗戰後の我が國は、どこもかしこも無秩序と混亂の渦卷である。暴力が物を言ひ、道義は地に墜ち、闇が横行する。社會淨化の熱意に溢れる人達の懸命の努力にかゝわらず、蕩々たる濁流は堰を切つて氾濫する。然し改革、淨化の望みは棄てられるべきでない。淨めは諸方面から行はれようとしてゐる。

淨めるとはどういふことをするのであらうか。經濟的に立直しを行つて富の分配を公正にし、物質生活の水準を高めようとするのも理想國土建設の一つの手段であらう。また生活の科學化、合理化を早めて、自然力を充分に利用して人間生活の內容を豐かにするのなどもその一方法であらう。或は政治的、法律的な方面からの改革も必要であらう。然しこのやうな改革は主に物の上からか形の上からか

（一）

淨佛國土、成就衆生といふ言葉がある。これは大乘佛教の究極の理想を示すもので、淨佛國土とはこの國土を佛の國土として淨めることであり、成就衆生とはその國に住む人々の悉くをして、生活を、特に精神生活を完成させてやることである。國土を淨めてそこに住む人達の悉くを濟ふことは、大悲行の徹底であつて、利他の大悲は必ずこのやうな所までつき進められねばならず、菩薩が佛道を成ずるには、まづこれの實現が條件とされねばならない。詳しくは般若經や維摩經の說く所を見られるがよい。

（二）

爲される淨めで、まだほんとうの淨めとはいへない。なぜならば、かういふ改革の試みは、いつも初めはうまくゆきさうに見えるのであるが結局は成功しないからである。成るほど生活の科學化は人間の幸福を何倍にか增大して改造といふ點で莫大の効果を擧げたが、それは同時に武器を發明し改造し、人間を戰爭に追ひやつて遂に地獄に敲き込んでしまつた。また經濟的とか政治的とかいふ方面からの淨めは、淨めどころか汚すことにしか過ぎないのは、毎日の新聞で見てゐる通りである。また何をか言はんやである。

そこで物や形の方面からでなく、心の方面からの、內からの淨めがどうしても必要となるのである。道義の昂揚を目的とする倫理運動などその貴い努力の現れである。けれども殘念なことに、これもまた、なかなか成功することは難しい。何故であらうか。道義とか人倫とかいふものは動き易いもので、別段これといふ確かな標準があるわけではないからである。別の言葉で言へば、倫理的な淨めの運動も、その他の總べての物の方面からの淨めの試みと同じやうに、やはり淨める方と淨められる方とが同じ地盤に——同じ現實に立つてゐるからである。標準とは動くもの變るものに對する動かぬもの變らぬものをいふのである。倫理的な淨めにはその標準があるやうに思はれるが、實はないのである。それが、同じ地盤に立つ限りは、淨める者は淨められる者と同じやうに汚れてゐるから淨めにはならない。恰も濁つた水で洗濯をするやうなものである。

（三）

現實に立つ者は眞の意味でその同じ現實を淨めることのできないのは何故であらうか。それは現實をあらしめてゐるものは「私」に纏はる慾望であり、現實は「私」によつて滲透されてゐるからである。そこでほんとうの淨めとはこの「私」を突破した者、「私」を超えた者によつて爲される淨めでなくてはならない。般若經によれば、淨佛國土とはまづ身口意の三業を淸淨にすることであるとせられ、それに基いて六波羅蜜を行ずることであると說かれてゐるが、いづれも私を突破して私を超えた所に立つことである。これが宗教的な淨めである。現實を突き拔けて、そこから現實を見返へすのである。超現實に立つて現實を淨化するのである。

（四）

「私」は現實生活に於ける限界點で、現實とは「私」を中心としてその周圍にひかされた緣暈である。現實の生存はこの「私」によつて限られてゐるばかりでなく、死によつて限られてゐる。死は生存の限界である。「私」があるからその限界である死があるともいへる。それ故「私」の超越は死の超越であるといはねばならない。

宗教とは何であらうか。その特質はいろいろに叙べられるであらうが、凡そ宗教であるからには、それは生存の限界の突破、超越を目的とする敬虔なる實踐でなくてはならない。「私」の超越、死の超越こそその目的である。人間生存の限界を切實に意識し、死を眞に主體的に自覺し、時にはその前に戰き畏れて速にこれを離脱しようとする——それが宗教である。生死の解脱であり出離である。

（五）

淨佛國土の大願を成就するために三阿僧祇といふ長い間六波羅蜜の修行を續ける菩薩の行願は尊い。それは限界超越の困難な道である。然し生死を出離する道は必ずしもこのやうな困難な道とは限らない。如來の本願に隨順し歸命してお導きのままに生きてゆく日常もまた、私を突破し限界を超え出でる道である。如來の本願に隨ふとはどんなことであらうか。この本願を說くのに色々に說話的な表象を用ひるけれども、必ずしもさやうな說明は必要としないであらう。本願とは生きた大きな力が導き救ふ力として一刻も止むことなしにこちらへ働きかけてくることである、人がそれを氣着くと氣着かないとに拘らず……。豫めこちらへ結びついてゐた超越的な力がいよいよその結びを固くしてくることである。水瓶の濁り淀んだ水を棄てて新しい淸らかな水を注ぎ込むやうに、私を棄て心を虛にしてこの救ひの力を頂かねばならない。それが本願に隨ふのである。その媒介をなすものは念佛である。

本願に隨順してただお導きのままに生きてゆく歡喜と報恩の念佛者の生活は、難しい理窟は拔きにして、そのまま國土を淨めるものではないか。宗教の持つ實踐的意義は尊く且つ高い。かういふ人が一人ゐると、世の濁りはその人を中心にしてその周圍から次第に澄んでゆく。現實生活はかういふ人達の周りから淨められてゆく。（完）

敗戰

醫學博士　和田正系

太平洋戰爭は遂に慘憺たる敗戰を以て終つた。戰時中は口外することも出來なかつた事實が次々と發表せられ秘密が曝露せられると同時に、饑餓と生命の危險に戰慄せざるを得ない國家の混亂と窮乏とを身を以て體驗した國民は遂には自信を失ひわが民族への信頼すら動搖せんとするに至つた。軍官の暴狀と醜體、欺瞞と背信、無恥と無能。然し懺悔反省すべきはひとり軍官のみではなかつた。恐く國民の一人と雖も無關係と云ふ者は無いであらう。憐むべきは國民の無智、國家の運命であつた。然も戰後の人心の動搖、道德の荒廢、社會問題の續出、止る所を知らぬ流轉の大旋風は動もすれば國家の前途に光明を失ひ再建の希望を失はしめんとする。從來は光輝ある傳統國民として其の美點長所のみを誇稱した人士も、今は反對に其の短所低劣の方面のみを擧げて自ら嘲笑し他を罵倒して以て快と爲す。靜かに國民性を稽へ國家の運命を思ふ者、歷史の上から、更に又今次大戰の全經過を通じて日本國民の態度と日本國家の動向とを熟考して悲劇の根本を國民性と素質とに歸し、未來の運命に關しても甚だ悲觀すべき見方を述べる人もある。私共の仲間は近頃よくこの樣な問題で議論したり爭つたりするのであるが、皆何れも心中には名狀し得ぬ苦悶を持つて居るのであつた。

この樣な時に、私は先頃獨逸のバウムガルテン著「戰爭の道德的反省」（金子氏譯）といふ書物を讀んだ。この本は前世界大戰に於ける獨逸の社會問題を取扱つたのであるが、驚いたことには現在敗戰の泥沼に喘いでゐる日本の社會情勢は實に三十年前の獨逸と實によく似て居るのである。日本に三十年前の獨逸を其儘に再現して居ると云つてもよい程である。私は今この中から少しばかり目についた箇所を拾つ

て見よう。

×　×

この著者は前大戰に於ける獨逸敗戰の原因は「意志は勝つ」とか、「身體を形成するものは精神なり」とか、「正義は所詮正義なり」とか、「敵多ければ名譽多し」とかいふ獨逸一流の理想主義にあつたので、「犬多ければ兎死す」とか、「金と鐵との優勢が勝利を決する」とかいふやうな理性的考へ方が缺けてゐた故であるといふ點から說き出して居る。かくて獨逸國民として考へ得られぬことは遂に現實的とはなり得なかつた所に悲劇の根底があつたのであるといふ。

戰爭が長引き物資の缺乏が懸念され出すと强制規定の氾濫と相互に矛盾する制限とが國民大衆の生活を堪へがたい重荷と爲し、買溜の人や横流し人や戰時利得者が一方に增加する窮乏を尻目に跋扈するに至り、優しい利他的感情は休みなき掠奪本能によつて支配され遂に支離滅裂となつた國家を食つて了つた。

上流下流を問はず、すべての社會殊に若き女性の調子はづれの狂騷と享樂慾、裝身慾と流行慾、放埒なる陽氣。更に恐る可きは青少年の荒廢であつた。父親は戰場にあり、母親は買出しやその他の用事に家庭を空ける時間が多く監督と叱正の不充分はふらつき歩く小僧達の仕末が出來なくなつた。然も子供達に高い報酬が得られる工場に働き分不相應の金を持つて煙草や酒やカフェーで浪費し犯罪は增加する一方である。又極端な住宅難は家族の親密感やその他のあらゆる優しい感情を奪つて國民の精神を粗野にし荒廢に歸せしめた。

物資の缺乏は、法律を回避して手に入れんとする惡習を必然的に生じ、他人の苦痛をよそにして、各自が孤立した生活をするやうになつた。かくして正直な者は生きることが出來ず、不正を犯すことが權利であると思はれるに至つたのである。これを著者は道德のモラトリアム、道德のアナーキズムと云つてゐる。この影響の最も恐る可きは青少年に對するものであつた。禮節と正義との觀念を根本的に動搖せしめられた若き者達の精神こそ國家の前途に對する最大の危險であつたのである。

次に國家的社會的性格に及ぼした影響である。戰爭は最初民族の事柄として國民の團結を鞏固にしたものであつたが、末期には戰爭は、民族と民族とが戰つてゐるのではない。單に資本家や支配階級が自己の特權を維持せんが爲めに大衆を犧牲にしてゐるのであると思はれるやうになつた。斯くて戰爭の發生や遷延や敗北に對するあらゆる責任を相互に果しもなく轉嫁し合ふ泥仕合が行はれ、同じ國民として同じ民族としての連帶感情が跡形もなく消え失せた。これは大戰の民族に及ぼした最も恐る可き道德的影響であつた。

「素晴しいですよ。この狀態が二三年續けば農業が一番好い商賣と

なることは確實ですよ」と或る農民が答へたといふが、苦難と希望、名譽と獻身のうちに結びつけられてゐた全民族的國家的感情は益ゝ弛み、國家全體の利害よりも、階級的、職業的利害の方が重大視され、各黨派、各組合は自分の利益を主張して互に反目し合ひ、遂に「黨派的な奴」といふよりひどい罵言は無いようになつて了つた。この黨派的鬪爭に一層拍車をかけたものは新聞の粗大粗野なる作用であつた。

最後に重大なのは大戰が次の世代に對する責任感に及ぼした影響であつた。健全なる國家社會にとつて極めて重要なことは、國家の次の時代に對する、及びこれを背負つて立つ若者に對する責任感情である。世界大戰は下から上への關係を頽廢させたと同じく、上から下への關係をも頽廢させた。敗戰は指導者卽ち兩親や主人や先生や親方の權威を失はせた。青少年の解放が進むと共に彼等はこれら目上の者の指導を肯んじないやうになつた。それと同時に大戰は青少年に對する此の責任感情を兩親や主人や親方の肩から取除いて了つた。これは青少年の人格の自由な成長を助長したであらうか、又一方年少の世代をして相續すべき多くの智慧と幾多の經驗とを失はしめ、民族文化の積極的建設に多大の損失をもたらせたのである。この事に關して深刻な關係は貯蓄慾の頽廢であつた。インフレは貯蓄を無意味にし、出たとこ勝負式の生活が習慣となつて、一家の將來や子孫に對する健全な家政を抹殺して了つたからである。現在を樂しめ式の思慮も訓練もない享樂生活が必然的に輕卒な青少年の心を支配せざるを得なかつた。

民族の維持と繁榮とに對する神聖なる奉仕と考へられてゐた結婚の道德的考へ方は世界大戰によつて完全に攪亂されて了つた。獨逸民族の甚しい零落、子供を將來の悲慘に曝すことの不愍、又少しでも家族の增加することの不安は意識的無意識的に產兒を制限せしめた。「我等の神の作り給ひしものは、神又兒捨て給はざるべし」といふ古き歌の確信と信賴とは全く消え去つて了つたのである。

× ×

以上極めて僅かの技萃で著者の結論も亦私の感想も書き加へる紙數が無くなつて了つたが、たゞ一言附け足すことゝしたい。このやうな苦難を嘗めた前大戰の獨逸もナチスによつて一應再建の成功を見たのであつたが、今回の大戰によつて今度は徹底的に破滅して了つたのである。我等はこの獨逸の歷史によつて實に深刻な反省と批判との資料を得たと云ひ得よう。然し餘りにも遲過ぎた。が遲過ぎても知らぬよりは幸ひである。

童話

ひまわりの種子

合田徹雪

もう遲い。速度は緩めてゐた積りでも、何しろ魔法の靴を履いてゐるので、氣が附いた時には、落した位置より餘程離れた所まで來てゐました。

其間に、落ちた件の玉手箱と魔法の杖は、下界で幼い一人の男の子に拾はれてゐました。その子は小さくても賢い子でしたから、大人達の噂話を聞いて、王様が御秘藏の寶物を失くして大へん困つてゐらつしやるといふ事を、知つてゐました。ですから直ぐ其足で、其子に取つては重い二つの寶物を、ヨイショ〳〵と、小さなおでこに汗の玉を浮べて、お城の中へ運び込みました。これを見て喫驚りした門番は、長い威かめしい槍を、其處へすつぽり出すと、寶物と一しよに男の子を抱きかゝへて、どん〳〵お城の中のながい、幾つもの階段を上つてゆきました。奥殿で、立派な椅子に靠れて、物思ひに沈んでゐらつした王様は、男の子を見ると非常にお喜びになりました。其頭を優しく撫でながら、心からお禮を仰しやいました。そして、

「寶物を盗まれたのもわたしがいたらなかつたから」

「どんなもんだい」

飛行靴の魔力で、ほんの瞬く間に鬼達の目の屆かぬ所迄やつて來た若者は、足許を緩めて赤い舌をペロリと出しました。

「態を見ろ。まぬけ野郎。……矢つ張り俺は偉いんだな。あんな無學文盲の鬼等と違つて、俺にはちやんと知識といふものが備つてゐるし、それに生れつきの智惠者なんだから。フン。誰がこの大切な寶をお城へなんか持つて行くものか。切角手に入れたんだもの。これからは此不思議な玉手箱で、うんと美味しい物を食べて、毎日立派な着物を取換へしては着て、それからこの魔法の杖で、豪勢な御殿みたいな家を造つて……。さうだ、あの王様のお城よりもつともつと立派な、こんな大きい……」

有頂天になり、うつかり手を擴げた拍子に、兩脇に卷込んでゐた玉手箱も魔法の杖もするりと拔けて、見る〳〵うちに遙か地上に墜ちてしまいました。

「アッ失策つた！」

とお洩しになり、お傍に附いてゐながら、勤めを怠つた家來達を少しもお咎めになりませんでした。家來達は、

「三つのお寶の中、飛行機だけが返つて來ませんのは王樣が永久に榮えて、お城から遠くになどお出ましになる必要の無い事の證據でございます」

と、巧い事を言上しました。が王樣はそんな言葉にはお耳を貸さうともなさらず、慈しみ深いお目で男の子に、

「可愛い子供さん。わたしはお前に何かお禮に上げたいのです。何がよろしい？」

と仰しやいました。男の子は少しも惡びれず、

「向日葵の種子……」

と答へました。

「何？　向日葵の花の種子？」

どんな物を欲しがるかと思つたら、たかの知れた花の種子と聞いて慾張り揃ひの家來達は呆氣にとられました。此子は可哀相な孤兒でした。それでいつも彼方此方で食物を惠んで貰つては餓をしのいでゐたのですが、昨日の夕方、貧しい花作りのお婆さんから貰つた向日葵の種子が、お婆さんの深切と共に、非常に嬉しかつたので、つひそれを思出して申したのでした。

「ではそれも上げやう。がそのほかには？」

然し男の子は、つぶらな瞳を上げ、

「何にも要りません」

とかぶりをふつてみました。並居る人々はその純眞さに、頭を下げない譯にはゆかなくなりました。王樣は深くお考になつて、中出通りに、其子が背負へる程度、向日葵の種子を袋一ぱいつめて、持たせておやりになりました。

男の子はお城にお暇を告げると、また當ても無く町を拔け、山の方へやつて來ました。すると、先刻の二匹の鬼がまだ諦めきれず、ぶつ〳〵云つてゐるのに出會しました。通り過ぎやうとした時、「玉手箱」とか「魔法の杖」といふ言葉が耳に入つたものですから、

「あゝそれなら……」

と思はず口に出してしまひました。

「何い、貴樣その寶物の中を知つてゐるのか？　何處で見た。早く云へ！」

さう云つて鬼達は睨みつけました。其顏の怖い事つたら、男の子は一ペンに縮み上り、つひ心にも無く生れて初めて嘘をつきました。

「向ふの土地の中に、人が埋めてゐました……」

「何處だ、何處へ埋めた？」

そこで二匹の鬼は、仕方無くいゝ可減に云ふ其子の言葉を頼つて、あちらこちらを矢鱈に掘り返しました。

「小僧！　嘘をついたのぢやあるまいな。寶物が出て來る迄こゝに居ろ。逃げたりしたら承知しないぞつ！」

男の子はもう生きてゐる心地がしなくなりました。脊負つてゐた袋の口から、ボロ〳〵と、折角王様から戴いた向日葵の種子がこぼれて落ちてゐるのさへ氣附きませんでした。鬼達は尙もせつせと方々を掘り續けました。すると、不思議な事には、鬼達の頭の上にニョキつと出てゐた二つの角が、流れ出る汗の爲に、だん〳〵溶けてゆき、遂々すつかり無くなり、また同じ汗に洗はれて顏もきれいに普通の人間と同じになつてしまいました。不思議といへば、鬼達が知らず知らずに耕したあとの土地から、次々にポツン〳〵と、可愛らしい芽が生えたかと思ふと、見る〳〵うちとに脊高く延び、黃色い大きな日向葵の花がポカリ〳〵と咲き始めました。不思議はそればかりではありません。其花の中から、何と黃金のかけらが、折からの太陽に反射して、まばゆい程澤山落ちてゆきました。バラ〳〵バラ〳〵。二匹の鬼、否もう立派な人間になつた二人は、ビックリして尻餅をついた儘、たゞ呆然とそれを眺めてゐるばかり……。男の子はと見ると、お腹がすいたのでせう、殘り尠くなつてゐる袋の中の向日葵の種子を、取出しては口に頰張つてゐます、其小さく可愛いお手々で……。

それにしても、先刻の若者はどうしたのでせう？　なしろ飛行の靴を履いた儘なんですから、あれからずうつと方々を駈けずり廻り、いまだに無駄足を踏んでゐます。

武夫とグローブ

武夫は野球のグローブが、ほしくてたまりません。

『お父さん、正ちやんもグローブを買つたよ。ねえ、ぼくにも買つてよ。』

お父さんにねだりました。お父さんは、ちよつと考へて首をかしげました。

『うん、買つてあげるよ。』

お父さんは、やさしく言はれました。武夫はうれしくて、その夜は、ろくろくねむれませんでした。

『困つたね、買つてはやりたいが、なんしろ高くつてね。』

『四百圓も五百圓もするんじゃ、勿體なくてねえ。』

お父さんとお母さんのひそひそ話す聲が、隣りの部屋から聞えてきました。武夫は、はつとしました。惡いことをねだつたな、と心にとがめました。

『たのんでみるわ、秋山さんがいらないグローブをもつてゐるつて、もうせん、言つてたから……』

武夫はすまないなあ、と思ひました。

お父さんとお母さんのやさしい心が、涙のでるほど、胸をつよくうちました。そして、いゝ子になるんだ、いゝ子になるんだとくりかへしてゐました。

會員のページ

この頁は會員ならびに讀者の頁です。自由にお使ひ下さい。

成道の日

十二月八日は、釋尊が悟りをひらかれた日である。

武田正信

十二月八日がきた。

夜あけにちかい、すみきつた初冬の空に、宵の名星がきらきら冴えてゐる。清らかな光である。世間の塵にけがれた身も心も、洗ひ清められるやうである。

二千有餘年の昔、悉多太子は、この光りをながめて、悟りをひらいた。人間釋迦は、佛陀釋尊となつた。迷へる人の世に、救ひの光りが輝きだしたのである。

長い修行の時間——二十九歳の時（一說には十九歳ともいふ）、四門より出遊して、まのあたりに見た生老病死のいたましい人間苦、は太子の心を底しれぬ悲しみにつきおとした。深刻な懊惱にもだえた幾夜かが、すぎ去つた。眞實に自己をみつめる心、そして、人類を愛する偉大な心は、ついに、この苦しみから解脫する教へをもとめて、いとしい妻子をもすて、深夜、王宮からぬけ出たのである。骨肉をけずる、修行がはじまつた。總ゆる宗教、哲學の門をたゝき、或ひは苦行に、或ひは思索に求道の旅がつゞけられた。苦行に肉體はやせおとろへた。しかし、惱みは解きほどされなかつた。解決を與えてくれる師も教へもなかつた。心の憂愁はつよまるばかりだつた。

『自分で解決するより方法はない』求めて得られず、弱りはてたからだを苦行林より運んだ太子は、川でからだを淸め、村の乙女の供養する牛乳に精氣をとりもどした。はじめから太子と修行をともにした五人の比丘たちは、修行者の恥さらし、誘惑に抗しきれない墮落ものと、惡罵をあびせて去つていつた。しかし、太子はなにか身うちに新しい力の湧きでてくるのを感じた。

太子は希望にもえて、ちかくの菩提樹下に、扶坐した。『悟りをひらくまでは、決してこの座を動かない』太子の決意はかたかつた。思ひつめた最後の修行である。さまざまの誘惑がおそひかゝつた。心は幾度か動搖した。しかし、太子は座をたゝなかつた。金剛寶座は、びくともしなかつた。惡魔と血のにじむ戰ひを演じながら、深い瞑想の生活がつゞいた。老死の苦しみの根源を求めて、生、有、取、愛、受、觸、六處、名色、識、行と順次にきはめつくし、遂に根本原因は無明なりと斷ずることができた。が、その十二

現代川柳ばなし

風來坊

最近の川柳を二、三ひろつてみませう。さすがに世相を諷刺したものが目につきます。

榮養失調卽品行方正也（夢聲）

くそまじめに配給品だけで食つてゐたんでは、榮養失調になりますいや榮養失調どころか命がなくなるかもしれません。配給品だけにたよつて、闇は絕對に買はなかつた、さるまじめな大學の先生が、なくなつたのは何時でしたつけ。こはい世の中です。

玉碎の覺悟メチルを飲みにけり（夢聲）

同じ德川夢聲の近作です。メチル禍で命をおとす人は多いですがそれを覺悟で飲むんですから、酒飲みはたいしたもんです。命よりも大事なメチル、物騷な世の中ですが、その度胸たるや全く愕きいつたものです。

復員へ居候とは口が過ぎ（正岡容）

なにか惡いことをしたら、復員

因縁が、いまだ完全に體驗されなかつた。太子はさらに瞑想をつゞけた。老死から出發して生乃至名色、識、行、無明、その無明から逆に名色、識、行乃至生、老死と順逆くりかへし、命をかけて解脱の法を求めつゞけた。激しい求道の生活だつた。

ついに時はきた。ほのぼのと夜明けのちかずいた清澄な空に、神々しく輝く名星を眺めた時、突如一筋の光が心内に流れた。迷ひの心はひらかれた。無明のとばりはやぶれた。大らかな、明るい心、生老病死の苦しみから解放された、限りなき喜びの世界があらはれた。太子はあまりの喜びにうつとりとした。

長い間、なやみ、苦しみ、そして求めつゞけた法が、發見されたのである。自己一人の惱みが解決されたばかりではない、全人類の救はれる法が見出されたのである。三十二相の妙好に輝きながら佛陀釋尊は、いつまでもいつまでも、限りない愉悅にひたつてゐれこれ十數年になります。時のたつのは早いものですね」

靜かに語られる先生、胸中にはさぞかし、過ぎさつた數々の想出が去來したことでせう。私は先生の言葉を聞きながら、こゝで亡くなられた奥様のことを考へてゐました。こんな靜かな世界で、毎號「淨土」を編集してゐるのに、格別いゝ雜誌も出來なくて、讀者並に先生に對して汗顏の至りですが先生の御指導と讀者諸兄姉の御後援によつて、必ずいゝ雜誌にする覺悟です。

なほ、編集上の御希望や御意見は今後、左記宛に御送り下さい。

東京都世田谷區玉川瀬田町五四六

法然上人鑽仰會「淨土」編集室

どうか、御元氣なお便りをどしどしお送り下さい。

×　×　×

十二月八日、佛教徒いや全人類にとつて、忘れることのできない貴い貴い聖日である。

編集室より

最近、吉田絃二郎先生の御好意で玉川瀬田町の先生の御邸宅で、淨土を編集してゐます。先生は「淨土」の復刊を誰よりも喜ばれ多忙の中からすすんで原稿をお書きになり、數々の忠言をよせてゐられましたが、たうとう、靜かな玉川の御邸宅を「淨土」の編集室に提供されました。事務所難の折から、誠に有難いことです。

今日も、編集を終へて、やはらかい初冬の陽差しをうけながら、先生にお話しをうけたまはりました。大木や竹にとりかこまれた庭にはもみぢがまつ赤にはえてゐます。散りつもつた落葉は、そよとも動きません。靜かな寂境です。

「こゝへ御邪魔するたびに、心が靜まります」

「さうですか。こゝに住んで、かゝ者のせいにします。社會は白眼視してゐます。戰爭最中には、あれほどちやほやしたのに、あまりにも薄情ではないでせうか。長く故國をはなれてゐたんです、慰めてやるだけの度量はもちたいものです。江戸つ子らしい人情味のある句です。

二合五勺お前讀んだか讀みましたか

（水府）

最近、二合五勺增配のニュースほど、家庭を明るくしたものはないでせう。どの家庭でも嬉しさのあまり、主人も妻も新聞をくりかへし讀んだことでせう。

滿員車骨がコツコツふれあふて

（京介）

この頃の乘物の混雜は全く殺人的です。勤めに出るたんびに、奥さんと水さかづきをするといふ悲壯な話しもあります。じようだんじやありません、壓殺されたり、ふりおとされて大怪我をする人がざらにあるんですから。それにしても、もみあつて、やせ細つた骨ばかりのからだが、コツコツふれあふとは、あまりにもみじめです。早く樂にしたいものです。

信仰相談

往生といふことは？

擔當　中村辨康

信仰相談

（問）「淨佛國土成就衆生」と云ふことが淨土教でも言はれて居るやうでありますが、それは聖道門的な思想から來て居るのではないでせうか。即ち菩薩としての誓願である「上求菩提下化衆生」と云ふことを積極化した言葉であり、成佛所願の具體的表現かと思はれます。隨つて淨土教の中心思想である「淨土への往生」と云ふ考へとは異つて居るかのやうに思はれます。誠に御面倒ながら「往生」と云ふことを委しく御說示願ひたうございます。

（東京、世田谷、GH生）

（答） 大變むつかしい御質問で簡單には御答へ出來ないかも知れません。仰せの通り「上求菩提下化衆生」と云ふものの替言葉のやうに見へる言葉であります。聖道門的なものに相違ありません。然るにこれを淨土宗で特に云はれたのは第二祖の鎭西聖光上人であります。この言葉は一應は淨土門として相應しくないやうにも受取れますが、然し淨土門的な理解が出來ない譯ではありません。もとより「往生」を期して居るのであつて見れば、自分自らの佛國土を建設する意味ではありません。即ち此土に於ての「往生業」は直ちに阿彌陀佛の淨土をいやが上にも淨めんとするしわざであるからであり、そして同行相連なつて「往生の業」たる念佛をお互ひにすゝめ合ふことは、とりもなほさず衆生を成就せしめんとするしわざであります。「念佛」を押し廣めて言へばそう云ふ意味にならぬこともないのであります。元來鎭西上人は元と天台宗の學者でありましたから思想の間口が廣く、聖道門的なところを多分に含んで居られますし、またそれ以後の淨土宗の學者達も、或は倶舍唯識を學び或は華嚴天台を學んだその下地のもとに淨土教を考究しましたし、また一般佛教は其目的を成佛に置いて居るので、淨土門も亦た往生後に於て成佛するものであると云ふ考へから、むしろ菩提心を發す方が本當だと云つて居る人もあるのであります。隨つてかうした上求菩提下化衆生とか淨佛國土成就衆生とか云ふ菩薩の持つべき志は當然あつてよいと是認して居たのでもあります。

然るに法然上人に從へば「成佛主義」は解消さるべきものであります。大原の顯眞法師が法然上人に坂本で面會して質問したのに對して法然上人は答へて「成佛は難しといへども往生は得やすし云々」と言つて居られますやうに、成佛と云ふ考へは捨てられて居るのであります。ですから澤山ある法語の中に、「成佛を求むる」と云ふやうな御言葉はいくら探してもありません。唯だ一つ選擇集の中に「およそ五種の嘉響をつたへて、二尊の影

護をかうむる。これはこれ現益なり。また淨土に往生して乃至成佛す。これはこれ當益なり」と云ふ言葉がありますが、それとても成佛を中心としたものではありません。法然上人に於ては既に成佛主義は捨られて居ることを銘記すべきであります。然るにその後鎌倉期から德川期まで封建時代がつゞいた爲に民主主義の淨土門は閉塞させられて其眞價を發揮することが出來ず、加之、若干の聖道門的思想さへ加味されて來たのであります。然るに法然上人の御信仰は何處までも往生を所求するものであつて成佛にあるのではありません。是は私の一家言かも知れませんが、成佛思想は封建的な要素を多分に含んで居ります。然るに往生思想は限られた一部の特權者を主としない、一般民衆を目標とするものであり、自分で佛國を作るものでなくして自由な國の中に生きることを求めるものであります。卽ち往生とは「ゆきいきる」ことであり「止まり死ぬこと」の反對語であります。しかも私達の日常生活はちつとも進展のない足踏狀態でありますから、これを精神力に依つてもつと積極的なものたらしめんと念願するところに念佛があるのであります。されば法然上人は「一念に一度の往生を當て置きたまへる願なれば念々毎に往生す」と云つて居られ、一聲の念佛が眞劍に申される時、その一念は正しく積極的な一念として淨土へ往生して居るのであるとするのであります。されば往生は後生ばかりのものではありません。今世後世を通ずるものであります。しかもその積極的な一念は念佛に於て本當に邪念のない淸白のものとなるのでありますから、その淸淨無垢の有樣を蓮華に譬へて「斯界一人念佛名、西方便有一蓮生」とも云つて居るのであります。それを後生にのみ考へさせたのは昔の封建思想がそれを左右したからであります。然し乍ら今日ではもうそれは訂正されてよいものと存じます。

再版出來

吉田絃二郎著

武藏野記

B6版二〇〇頁
定價十三圓（送二圓）

再版も殘部僅少です。部數に制限がありますので至急お申込下さい。

東京都本郷區東片町一〇〇
發行所　船形書院
取次所　法然上人鑽仰會

編集後記

◇昭和二十一年も、まさにゆかんとしている。來年の正月はと、希望をつないでいた今年ではあつたが、さて年の瀬にきてみると、相變らず苦しい。餅すら滿足にたべられさうにない。

◇戰敗國だ、一年や二年で、さう簡單にたち直れるもんではないと言ひ切れば、それまでだが、問題は、やりようでは、こんなに窮迫しないうちに、もう少しどうにか打開する道はなかつたか、といふ愚痴である。

◇十月に火ぶたをきつた勞働攻勢が、十一月、十二月と、しだいに經濟闘爭より政治闘爭の色彩を濃くしてきたのは、この愚痴の爆發ではないか。そして火の手は强くなり、今や吉田内閣打倒の聲は勤勞者階級の胸より烈々と吐きだされてゐる。

◇終戰後すでに一年四ケ月、回顧すれば、迂餘曲折、よたよたに歩きつづけた、自信なき姿が瞼にうかぶ。かうした足どりで、はたして日本は立ちなほれるか、廟堂にはんべる者の責任は寔に重い。しかも、その人々の自信なさ、意見の不一致、政治の貧困がつく〴〵目に見える。國民大衆から見はなされんとしてゐるのも、むべなるかなである。

◇どん底にあえぐ日本、人材の拂底になやむ日本、左右兩派とも確たる自信をもたぬ日本、混沌たる現狀である。

◇しかし、わたし達は希望を失つてはならない。いかなる窮乏の中にも、曇らない、純心な心をいだいておれば、希望を見出せるものである。わたし達の生活は弱いようで强いものだ。

◇さゝやかなことにも希望を見出さう。そして見出した希望には、全力をかたむけ、良心をなげうつてつき進まう。明るい世界がおのずから開けてくるものだ。

◇それにしても、いかなる苦しみにもひしがれざる、逞ましい心、どんな逆境にもひがまぬ、ゆとりのある、のびやかな心——宗教によつてのみ與へられるものだが——わたし達は、いつも、そんな心をもちたい。

◇お約束をうらぎつて、今號もまたおくれた。かなり努力はしたが、おくれた發行日を年内にとり戻すことは、ついに出來なかつた。で、來春より心機一轉、再出發するために、懺悔の心で本號をおくることにしたのである。御諒承を乞ふ。

◇佐藤氏から『國土を淨めん』の名篇を、また緣古深い和田博士から玉稿をいたゞき、誌上に花をそへ得た事を、讀者と喜びたい。

◇では、讀者諸賢とともに、來年の多幸を心から祈念してペンをおく。（東）

編集上の批評、希望をお送り下さい

「淨土」十一月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可
昭和二十一年十月二十日印刷
昭和二十一年十一月一日發行
（定價一圓六拾錢）

編集兼發行人　東京都芝區芝公園淨土宗務所　眞野正順
印刷人　東京都芝區芝公園淨土宗務所　村瀨秀順
印刷所　東京都牛込區市谷加賀町一ノ一二（東京一）　大日本印刷株式會社
配給元　東京都神田區淡路町二ノ九　日本出版配給株式會社
發行所　東京都芝區芝公園淨土宗務所　法然上人鑽仰會
振替東京八二一一八七番
會員番號B一〇八〇一四

會費　一ケ年　金二十圓（送料共）
振替振込みはすべて三十錢增のこと

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和二十一年十月廿日印刷納本・昭和二十一年十一月一日發行